救世軍の社会事業と山室軍平（その1）

三吉　明

（その1）

序
1. 石井十次と山室軍平
2. 濃尾の大震災
3. In Darkest England and the Way out.
4. 救世軍社会事業の草創期
5. 社会問題とキリスト教
6. 慈善事業と社会事業
結

（その2）（次号）

1. 日露戦争と救世軍社会事業
2. 公娼廃止論とその運動
3. 米騒動と関東大震災
4. 村井保固と山室軍平
5. 救世軍報国茶屋

序

田川大吉郎（明治学院総理・1869～1947）は，その著『社会改良史論』（教文館昭6刊）のなかに，「救世軍の社会事業」の章を設け，昭和4年度の救世軍の社会事業概目として，

1人事相談部　2刑務所警察署訪問部　3旅客の友部　4婦人救済部　5労働者寄宿舎・努力館・自助館・民衆館　6労働紹介所　7労作館　8釈放者保護所　9感化院・飲酒感化院　10育児院　11保育所　12婦人

ホーム・婦人収容所・女子希望館　13社会植民館　14結核療養所・病院
15克己週間事業　16歳末慰安会・同救護運動

をあげ，さらに

有らゆる社会事業の種類は，ほとんど一切を残さず網羅して居るのである。それを洽ねく視察すれば，略ぼ今日のいわゆる社会事業なるものの種類と性質，目的と要領とが理解せられるわけである。(P. 575)

と説明している。確かに今日からみても，社会事業の分類・範囲に包括されるところのものは，余すところなく，ここにみることができるといえよう。そこには救世軍そのものの発生・結団の趣旨もさることながら，明治28年（1895）イギリス萬国本営から派遣された救世軍に投じた，日本人最初の士官であり，のちの司令官山室軍平（1872～1940）の企画力・組織力に負うところがはなはだ大きい。「山室軍平と社会事業」については『日本歴史』（日本歴史学会編集）の7月号（1969 254号）の拙稿を参照せられたいが，本稿においては，特に山室軍平自身の社会事業に対する態度と，救世軍創業期[1]における社会事業が，草創期のわが国社会事業史上に果した役割について，いささか考察を試みたものである。

〔註〕(1) 少将山室軍平著『救世軍略史』（救世軍日本本営・大正15年刊）に「日本に於ける救世軍の運動を概観するに，之を三つに分けて考へるのが便利であるやうに覚える。即ち第1は明治28年秋の開戦当時から，同40年の春，軍の創立者，大将ウイリアム・ブースの来朝に至る迄，約20年間にて，之を創業の時代と名づくべく，第2は創立者の来朝から大正12年関東地方大震災に至る迄約15年間にて，之を発展の時代と名づくべく，第3は関東大震災以後，之を復興の時代と呼ぶのが適当であるかと思ふ。（下略）」と書いている。

1. 石井十次と山室軍平

山室軍平の社会事業への開眼は，実に岡山孤児院の創設者石井十次（1865～1914）とのめぐりあいであり，また救世軍へ投ずる動機でもあった。

石井は明治20年（1887）9月，「孤児教育会」を組織して，岡山市大通の三友寺の一室を借りて移り「孤児院」の看板をかかげた。22才のときである。爾来10年間この寺を本拠とした。彼は生涯刻明に日誌を書いているが[1]

九月三日　土曜日

若し孤児教育会にして人意的のものなりせば必らず，風波のために早晩破壊せらる可し，若し神の企て玉ふものにしてキリスト之が基礎たらばいかなる暴風怒涛と雖も決して破壊すべからず反つて之がために鞏固不抜のものとなる可し。

と記した。これこそ明治・大正期における「近代社会事業の父」といわれた，岡山孤児院誕生の宣言ともいうべきである。

また彼の生誕地・宮崎県児湯郡上穂北村茶臼原（ちやうすばる）に約60町歩（198ヘクタール）の原野を百円で購入した。これが岡山孤児院の教育場となった。彼は孤児を救済する単なる慈善家にとどまるのではなく，孤児をいかに教育するかというのが本旨であった。

石井は，岡山市の京橋下の乞食20余人を導き，三友寺の軒下を教場とし，3組に分けて授業を試みた。これを「襤褸（ぼろ）軒の下学校」と称し，いわゆる今日のセッツルメント活動の初めである。そして，明治22年1月10日（木曜日）「四ケ年間学び獲たる医書を焼尽せり」と書いているように，医学書に石油を注ぎ火を放て焼尽し，全心をあげて孤児救済事業に専心することとなった。

「人は二人の主に兼事（かねつか）ふること能はず」（マタイ伝6．24）

とする聖書の教えの実践であったのである。この時，「妻は泣き，友は悲しみ，世人は発狂せりと評した」と記している。そして会費による経営をやめて，臨時寄付金のみに頼ることとした。そのため8月末頃から，孤児院の財政いよいよ窮乏の極に達した。孤児はすでに60余人もいたのである。

明治22年（1889）9月6日（金曜日）の日誌に（原文のまま）

福音教会の信者山室軍平君来訪。金二十五銭を寄附し且つ自らの経歴と此れ迄受けし恵みにつひて感話せられ，予は大ひにアバ父の御膝下に近くことを得，共に聖書に由つて所感を述ぶ

山室兄の感

独立の信仰（ヨハネ4・42）　汚れに捫はる勿れ（コリント後7・17）

ポーロ愛の分解の章を毎週読むに至る可し（コリント前13）

などの字句がみられる。このときの山室は，京都同志社での第1回夏季学校

に出席したあと，同志社普通学校の上級生吉田清太郎・笹倉代七郎らのあとについて，岡山県高梁(たかはし)町の夏期伝道へ参加した。

当時の山室の印象について田川大吉郎は，

> 初期の夏期学校のころ，[2] 氏に逢つたことを私は覚えて居る。その清秀なる眉目，歯切れのいい談話振りを忘れずに居る。特に，その熱心火の如き雄弁，身も魂も打ち込んだ至誠真剣の祈りに動かされたことを善く覚えて居る。

と書いている。（田川大吉郎著「社会改良史論」）

その頃の高梁は，木造の大きな教会が竣工（明治22年9月）したばかりであった。[3] 山室は吉田とともに一軒間借をして，教会で説教をするほかは，老松橋の袂で30日間，毎晩1人で路傍伝道をした。雨が降れば傘をさして説教した。

> 山室君はその頃から説教が上手でありました。その説くところは平易明白で，而もよく人を感動させて居りました。私はこの青年は行末日本のムーデー（アメリカ会衆派伝導者―編者註）となるべき人であると思ひました。それから路傍説教をやりますとなかなかの聴衆で，子供を背負ふた女も聞きに来て燃やされてゐました。山室君が差支へたとき私が代つてやりましたが，折角集つた聴衆が大分散つて行きました。流儀が違ふ説教では，人が満足して呉れやう筈がありません。とにかく山室君は説教に就いて，一種独特の天才を有つてゐたと思ひます。

と吉田清太郎は書いている。[4]

夏休みが済むと，学生達は京都へ帰って行ったが，山室は別段誰から頼まれたわけではなかったが，しばらく伝道を続け，それから岡山市へ出て，初めて岡山孤児院を訪ねた。このときの石井十次とのめぐりあいこそ，山室の生涯に非常に大きな影響を与える結果となったのである。もちろん山室もまた，この日のことをよく覚えていて，

> 始めて石井十次君に面会し，私が活版小僧などして居つた為，他の青年と比較すれば，二三年学校教育が後れたにも拘らず，これから一と勉強

して，神と平民とのために立ち上りたいつもりであると，いふやうなお話をすると，石井君は其の朝読んだ所だといふて，イザヤ書第四九章を開き「もろもろの島よ，我に聞け。遠き所の民よ，耳を傾けよ。我生れ出づるよりエホバ我を召し，我が母の胎を出づるよりエホバ我が名を語り告げ給へり。エホバ我が口を利き剣となし，我を其の御手の蔭に隠し，我を磨きすましたる矢となして，箙にをさめ給へり」（旧約イザヤ 49.1）といふ句を引いて，神が将来，私を其の「利き剣」又「磨ぎすましたる矢」として，用ゐ給ふべく期待する旨を語り，私を奨励鼓舞してくれられた。別れる前に私は貧弱ながま口の中から，金二十銭をとり出して寄附すると，石井君は神に感謝して「神様，丁度今日，米を買ふに足りないだけの金を，此の兄弟によつて与へ給ふたことを感謝します」と言はれたには驚いた。

と，その追悼のなかで述べているが，(5) 石井十次24才，山室軍平 17才，「其の以来私共は互に相知り相信ずる友人として，同君の世を去らるる迄，かはらざる交を結ぶ」(6) ようになったのである。ここにも不思議な神の働きのあることを知ることができよう。

〔註〕 (1) 現在「石井記念友愛社」（宮崎県茶臼原）の児島虎一郎の手によって明治33年（1900）までの日誌が，1年1冊の割で復刻刊行され（非売），なお続刊の予定である。
(2) 田川大吉郎と山室軍平とは，第4回箱根夏季学校で顔を合せたのである。
(3) 高梁町の木造の大きい教会堂が竣工したばかりで（明治22年9月），この教会堂は昭和28年(1953)10月に，65年の風雪に耐えた重要文化財（史跡）として，岡山県の指定をうけた。
(4) 吉田清太郎直話・高田集蔵聞書著『信行ありのままの記』（磯部甲陽堂・大正15年7月刊）
(5) 小野田鉄弥著『石井十次伝』（石井記念協会・昭和9年4月刊）
(6) 山室軍平著『私の青年時代，一名，従軍するまで』（東京・救世軍出版及供給部・昭和4年11月刊）

2. 濃尾の大震災

明治24年（1891）は，いろいろな事があった。1月には札幌バンドの雄，内村鑑三（1861～1930）の教育勅語不敬事件があり，3月にはニコライ堂（日本ハリスト正教会教団東京復活大聖堂）が開堂され，そして5月にはロシアのニコラス皇太子が来日され，大津市京町で警衛巡査津田三蔵が突然斬

りかかるという謀殺未遂事件が起った。ロシア皇太子がまだ天皇に御挨拶もしないうちに，勝手に鹿児島・大津と遊覧するのは大逆無礼だというのである。しかし山室軍平にとって重大なことは，10月28日に岐阜・名古屋方面に起った大地震であった。

岐阜・愛知両県だけでも全壊・半壊・焼失家屋14,000余戸，死者約6,000余人（『明治震災録』）といわれ，ときの松方正義首相は，直ちに震災地を視察（10月30日），濃尾地方震災者への救援物資の輸送を無料で取扱うなど，直ちに救援手段がとられた。また緊急勅令による復旧費，岐阜県に150万円，愛知県に75万円支出されたが，この救済に不満をもった岐阜県罹災民千有余人が，県庁に殺到する（11月24日）などのこともあった。岐阜県は直ちに「震災救育所」を設け，殊に腸チブス続発の対策を講じた。このときの災害が，愛知・岐阜・福井のほか，三重・滋賀の各県にも及んだので，「濃尾大地震」とよぶことになったのである。

この頃，石井十次は，

「実業はよく人を教育し，又よく独立の人を造る」(1)

として，早くから適当な職業を学ばせ，活版印刷部・米搗・機業・理髪・麦稈真田（ばつかんさなだ）・マッチ製造の各部を設け，また小橋勝之助（1863～1893）の博愛社（明治23年創業）と合同の結果，この年10月に男子20人を播州赤穂郡矢野村瓜生（うりゆう）の博愛社へ送って農業を学ばせるなど着実に体制を整えつつあった。

当時のことであるから，濃尾の詳報が岡山孤児院に達したのは3日の後であった。11月1日三友寺の墓地に，

「震災の為に親を失ひし幾多の孤児を救ひ給へ」

と10分間黙禱したと，日誌に書いている。

山室もまた，かねてから石井に支援を頼まれていたので，土・日と天長節（11月3日）の連休を利用して，直ちに罹災地各町村役場を廻って，孤児救済の趣旨を告げて歩いた。(2)

石井も直ちに震災地を廻って93人の貧孤児を収容，うち30余人は岡山へ送り，約60人は名古屋に分院を設けることにした。

その頃，キリスト教に対する一般の理解は甚だ乏しく，「連れて行った子供はアメリカ人に売るのだ」とか，「生胆（きも）をぬいて薬にするそうだ」という噂を立てられたので，石井は名古屋市白壁町の鉛筆製造所の建物を買収して，この地方の人達が見ているところに「震災孤児院」という分院を開設するこ

とにしたのである。

この建物買収費200円は，年末・年始に山室が，東京築地の新栄教会や，植村正久の一番町教会（現・富士見町教会），あるいは横浜などの教会や，信者宅などを歴訪して集めてきたものである。石井の日誌には旅費として金3円を山室のために支出しているが，山室は羽織も，袴もなく「薄い洗ひざらしの筒袖の衣類を着て」いるだけで，足袋もはいてはいなかった。(3)

この大震災は，西本願寺が千円の義捐をするなど，全国的に人々の同情心・慈善心を動かして，わが国の社会事業発展史にも大きな転機をもたらす結果となったのである。震災各地の孤児収容は，岡山孤児院・博愛社のほかに「清薫幼女学舎」（東京）が設立され（11月），イギリス伝道師らによる「孤女院」（12月・東京）などもできた。

また当時，立教女学校教頭であった石井亮一（1867～1937）が，同様に震災孤児20余人を引きとり，私財を投じて東京府北豊島郡滝野川村に「孤女学院」を設立したが，そのなかに独立自活不可能の白痴児がいたことが機縁となって，わが国最初の精神薄弱児養護教育・治療専門の「滝乃川学園」（明治29年）が生れたのである。(4) あるいは罹災者の治療を始めたことから「岐阜訓育院」に発展したものもあった。

この年，後藤新平（1857～1929）は，前年の『帝国衛生制度論』につづいて，『帝国衛生原理』を書いている。前著は婦女子・児童の労働保護の必要を説き，後著は環境衛生の必要を力説した防貧的社会事業を提唱したものであった。このような社会事業理論については既に原敬（1856～1921）が『救恤論』（明治13年），植木枝盛（1856～1892）の『貧民論』（明治18年），さらに明治20年にはフオセット (Fawcett) の『貧困救治論』が大野直輔（大蔵省予金局長）によって訳出されており，明治23年12月の第1回帝国議会には，否決されたとはいえ品川弥二郎内務大臣によって，市制町村制がいよいよ施行される機会に（明治22年4月）「窮民救助法案」が提出されるなどのことがあった。

その頃わが国の孤児救済の育児事業としては，金沢の「小野慈善院」（1864）が，最も古くからあったが，明治時代に入ってからは，フランス天主公教のラクロット (Sister Lacrot) が，明治5年（1872）横浜に「堇女学校」（原称・慈仁堂）を建てたのを嚆矢として，「神戸女子教育院」（明治10年），シヤトル聖パウロ修道女会の「函館白百合園」（明治11年），日本聖パウロ会

「附属育児部」（明治12年・東京），さらには明治13年の長崎における「鯛之浦養育院」「奥浦村慈恵院」，つづいて「天主教女子教育院」（明治19年・京都），「玖瑰塾」（明治20年・東京）など，悉く外国宣教団の経営にかかるものであり，明治7年(1874)，隠れ切支丹の岩永マツらが，長崎に「浦上養育院」を開設したのが，邦人の手による最初であるとされている。

仏教各宗の碩徳らによって，東京に「福田（ふくでん）会育児院」が創設されたのは，明治12年（1879）で，つづいて大阪に「愛育社」（明治19年）が開設された。

霊南坂教会牧師小崎弘道（こざきひろみち）（1856～1938）は，明治14年に「懲矯院を設けざるべからざるの議」（『六合雑誌』第3号）を書いているが，囚人保護に着目したのは，神戸病院顧問ベリー（J. C. Berry 1847～1936）で（明治6年），金原明善（きんぱらめいぜん）（1832～1923）が，「静岡県出獄人保護会社」を設立したのが（明治21年），わが国免囚保護事業の最初である。

静岡県御殿場の「復生病院」が癩病院として（明治22年），横浜メソジスト教会宣教師ドレパー（Draper）の母マイライネ・ドレパーによって「横浜訓盲院」（明治24年）がひらかれるなど，わが国の社会事業施設の近代化は，これら多くの外国人宣教師たちの働きによるなかで，邦人の手によって，新しい分野が開拓されていった動機が，実にこの濃尾地方の大震災であったともいえるのである。横井時雄は『基督新聞』（明治24年12月・437号）のなかで，活気にみちた「震災地に於ける救助の情況」を書いているが，仏教誌もまた，

「耶蘇教徒の敏捷にして且つ勇敢なる概ね此の如し」

とキリスト教の影響を認めない訳にはいかなかったのである。（『教学論集』明治24年11月号）

また，この頃から地方下層社会の農・工職・商人らの離村向都の流出現象が盛んとなり，徳富蘇峰（1863～1957）の『国民之友』（明治23年87号）がわが国で初めて「社会問題」という用語を用いるようになったのも，見落してはならないことである。

このようにして，濃尾大震災を契機として，山室が岡山孤児院の事業に積極的に参加したことは，彼の社会事業を実践する上で，大きな教訓と経験とを学ぶ，またとないよい機会でもあった訳である。

〔註〕 (1) 小野田鉄弥著『石井十次伝』前掲書
(2) 山室軍平著『私の青年時代』前掲書
(3) 岡山県社会事業協会編『留岡幸助・山室軍平追憶記念集』（同会・昭和18

年刊)

(4) 一番ヶ瀬康子著『石井亮一伝』(精神薄弱問題史研究紀要1号・昭和39年9月)

3. In Darkest England and the Way out.

明治25年(1892)5月4日「ブース氏最暗の英国を同志社山本君より読んでもらえり」というのが,石井十次の日誌にある。これは当時アメリカ留学中の友人青木要吉が,「近頃非常に評判になっている書物だから」といって,送ってきたものであった。石井は余り英語が得意でなかったので,同志社の学生で英語に堪能な山本徳尚に訳読してもらい,山室がその聞き書きノートを作った。日誌によれば,この作業は少くとも5日間は続いている。この書物によって石井は,孤児院経営上の,多くのヒントを得ることができた。農業部の経営や,孤児院に音楽部をおきブラスバンドを組織して各地を巡演したことなど,みなこのときのヒントによるといわれている。山室にとっても,救世軍なるものを知る最初の機会でもあった。

山本徳尚は,明治26年(1893)に同志社を卒業すると,直ちに北海道集治監の教誨師として樺戸・網走に勤務し同28年11月退職後は,大審院判事三好退蔵らと共に感化院を設立するなど,生涯を社会事業に尽した人である。(1)

『最暗黒の英国と出路』(In Darkest England and the Way out)は救世軍(The Salvation Army)の創設者ウイリアム・ブース(William Booth 1829〜1912)が1890(明治23)年10月,ブース夫人の死とほぼ同時に発行されたもので,巻頭に「愛する忠誠なる妻」に献げると記されたA5判,約320頁,細字で布装上質紙を用い,全計画を一目瞭然とさせる図解が最初に掲げてある。

第1部は「暗黒」で,世界一の巨富を誇るイギリスの首都において,年中光を見ず,湿気と疾病の雲霧のなかに住み,明るい広い世界を知らないままに,一生を終る者,その内訳は無宿者・飢に迫る者・救貧院その他に保護されるべき者・受刑者・精神病者など,綿密な資料収集にもとづいて,総人口の10分の1,総計300万人はいる。これらを救うための計画としては,

1. 人生の戦に失敗した理由が,その品性や行為に存する時に,その人物を変化せしめねばならない。
2. 境遇がその窮状の原因であり,かつそれが彼の力に余るものである時は

その人の境遇を変化せねばならない。

3. 考慮に値する救治策は，その対応せんと企てる害悪に匹敵する規模のものでなければならない。
4. その計画は十分に，大仕掛であるとともに，永続的でなければならない。
5. ただちに実行し得るものでなければならない。
6. 利益を与えようと企てる相手に，損傷を生ずるものであってはならない。
7. 共同社会の一階層を助けつつある反面，他の階層の利益を甚しく侵害するものであってはならない。

としており，第2部「解放」には根本策として，

1. 都市殖民地　簡易宿泊所・大衆食堂・授産場・職業紹介所等。
2. 農業殖民地　地方の農地に帰農させ耕作・牧畜等に従事して，1戸の主となり，品性を改善し，他日海外移住の素地を作る。
3. 海外殖民地　南アフリカ・カナダ・西オーストラリア等の一画の土地に，救世軍が殖民の用意をなし，権威をもって建設し，衡平法をもって統治し，必要な際には助け，準備を整えた人々を漸次殖民させ，困窮せる人々のために家庭を建設する。

というのである。さらに

付随的なもの，

貧民窟の愛隣館・巡回病院・刑余者救助所・酔客収容所・婦人救済所・転落防止の少女ホーム・失踪者探索部・街頭児対策（保育園・託児所・等）・実業学校・素行不良者収容所

全般的補助策として，

住宅改善・模範的郊外村落・貧民銀行・貧民弁護士・調査相談所・結婚相談所

などをあげている。(2)

この著書は初版1万部が即日売切れ，1カ月後に再版4万部が出たといわ

れるほど，爆発的な売行きを示し，救世軍の社会事業が，全世界に飛躍的発展をする基礎をなした。そればかりではなく，ブースのこの提案は，諸外国の政府も採用し，他の団体でもこれを実施するものがでてきた。今日においても直ちに実行可能な，いくつかの示唆に富んだものを発見することができる。わが国の社会事業史研究者が，ともするとこれを見落していることは，甚だ遺憾なことである。

植村正久（1858～1925）は，『六合雑誌』（明治24年2月号）に，「将軍ブース氏の廃人利用策」と題する紹介の論説を書き，片山潜（1859～1933）や安部磯雄（1865～1949）らもまた，この書を手引きとして，イギリスの救世軍本営の事業を視察し，それぞれ実践や理論のなかに，組入れているのである。

都市における貧困者の生活状態を，実地について精細に調査した最初の人は，気船会社社長チャールス・ブース(Charles Booth 1840～1916)で，1886年から前後18年を費して，ロンドン市全域に亘って，私費による大規模な貧民調査をおこない，その結果を1889年から1902年にかけて，『ロンドン市民の生活と労働』(The Life and Labour of the People in London.) 全17巻を公にし，はじめて「貧困線」(Poverty Line) という語をもちいて，市民のうち30.7%は貧困線以下であることを明らかにした。

これに刺戟されたラウントリー (B. S. Rowntree 1871～1955) もまた，自分の住むヨーク市について1899年に同じような調査を試み，その結果『貧困—都市生活の研究』(Poverty—A Study of Twon Life.) を1901年に発表して，第1次貧困・第2次貧困など，今日の社会福祉研究に重要な研究が続々と生れた。

「ゆり籠から墓場まで」といわれるイギリスの今日の福祉国家・社会保章の基礎も，これら長年にわたる民間人の発意から生れた，忍耐強い調査研究があったればこそ，このことを忘れてはならない。しかし，その根本解決策を立案提唱し，しかも自らそれを実践して，大きな効果をあげたのは実にウイリアム・ブースであって，その功績は誠に大きい。世の中の貧しく，哀れな人々を助けたいという，火と燃える情熱を傾けたものこそ，救世軍なのである。

そして，石井十次はこの救世軍のことについては，既に松江市在住の宣教師バックストン (B. F. Buxton 1860～1946) から聞いて，知っており，明治24年（1891）の日誌に

将軍ブース氏に印度よりの帰途日本へも来遊あらんことを望むとの書面を依頼（9月25日）

とか，「ブースの渡来を祈る」（10月2日）などと記している。さらには，

思考　東洋救世軍の名称を付せんか
ああ時は熟せり東洋救世軍編制の秋来れり（10月3日）

などとまで書き，ついに「東洋救世軍」と称する伝道事業の構想をかなり詳細にまとめ「小橋兄来院，東洋救世軍の計画につき相談」（10月7日），「孤児院は即ち東洋救世軍の士官学校なるぞかし」と記している。そして11月の濃尾の震災孤児救済も，いわばこの運動の一部と考えていたようである。

明治25年の夏，山室は箱根で開かれた第4回夏期学校に出席して，岡山孤児院について話し，さらに草鞋ばきで，東京から上州へ，碓井峠を越えて，信州から越後へ，さらに会津を経て仙台まで行き，帰途西那須野の「暁星園」（孤児院）を見学した。東京では遇然に友人の渡米を見送りに来ていた石井十次とあって，ともに本所区長岡町の「東京市養育院」を見学して，大いに社会事業について学んだ。

〔註〕(1) 三吉明著「有馬四郎助」（吉川弘文館・人物叢書147・昭和42年10月刊）参照
(2) 山室武甫著「人類愛の使徒ウイリアム・ブース」（玉川大学出版部・昭和45年2月刊）参照

4. 救世軍社会事業の草創期

山室軍平が救世軍に加わることとなった経緯については，「石井君と私」のなかに詳しい。(1) それによると，「明治28年（1895）9月20日の朝，新橋駅に着き神田区三崎町の伊藤為吉氏の許に，小さな行李一つ担ぎ込んで置いて，直ちにその午後京橋区新富町六丁目新富座前の救世軍本営を訪問」したが，『石井十次日誌』には，

十月二十九日　火曜日　曇天
東京山室君より書面来る「救世軍共に語るに足らざるなり」と（下略）

とあるように，山室の第一印象は余程腹にすえかねるものがあったようである。しかし山室は，

> （上略）別れる前に，其の書記長官なる英国人の中佐が私に呉れたブース大将著『軍令及軍律兵士の巻』(2) といふ小冊子であつたが，私はそれを持つて帰り，読んで見て全く頭が下つた。（下略）

と書いてあるように，ついには「全く之に其の身を投ずる」こととなったのである。それは明治28年（1895）11月末であった。このことを聞いて，石井もまた「君は長い間探して居つた合鍵を到頭見つけたのだ」という意味の手紙を，山室に送っていることが日誌に記されている。そして山室は，日本人として最初の救世軍士官となった。(3)（明治29年１月）救世軍の最初の社会事業は，明治29年（1896）で，(4)

> 六月宮城県に大海嘯があり，三万人の死者を出したに付，救世軍でも其の為に義捐金を募集したが，余り捗々しい反響もなかった。

救世軍が日本へ来て（明治28年９月），まだ１年もたっていないのであるから，無理からぬことではあるが，その年10月26日午後３時から，小石川区音羽町に「出獄人救済所」の開設式がおこなわれている。３棟40人収容の施設である。これはのちに，牛込区赤城下町に移り「救世軍労作館」とよばれるようになった。出獄人という言葉が不適当であったからである。

近年のわが国の釈放者保護については，寛政２年（1790）の松平定信による石川島の「人足寄場（にんそくよせば）」に始まるといわれている。ベリーのことは先に書いたが，神戸にいて監獄の医者として，初めて囚人と接したことから，監獄改良の必要を強く進言したことによって，政府を動かした功績は大きい。

刑法（明治14年）には，少年の懲治場制度及び警察監視制度を規定し，監獄則（明治14年）は別房留置制を定めて，

> 刑期満限ノ後頼ルベキ所ナキ者ハ其ノ情状ニ由リ監獄中ノ別房ニ留メ生業ヲ営マシムルコトヲ得

として不完全ながらも官営保護をおこなった。群馬県では明治17年に，民間農家に留置者が働きにでることを認め，同20年には岩谷松平が東京の撒水人夫に留置者を引取り雇っている。同22年7月監獄則改正によって，別房留置制を廃して，民間にたよることとなった。同年京都感化保護院・新潟県出獄人保護会社・東京出獄人保護協会，翌23年には同様埼玉・大分・下関に設置されて，やがて全国に拡っていった。

救世軍が呱々の声をあげて僅に1年，社会的にまだその存在も認められていなかった時に，この至難な事業に着手したその達見は，称賛に価するものがあろう。

「余り早く此の事業に着手した為に，救世軍の者といふたら，残らず出獄者かと取違へられて，迷惑したやうなこともあつた」

と山室は書いている。[5] また翌明治30年，横浜居留地187番地に「水夫館」を開いた。港に停泊する船から上陸する水夫たちのために，60人の宿泊と食堂・読書室・風呂その他の設備があり，これは数年後に閉鎖された。この種の事業は，明治13年（1880）に，元帥海軍大将伏見宮博泰王を総裁とする「日本海員救済会」が各港湾都市にセーラース・ホームを開設し始めたからであろう。

そして，明治33年（1900）8月1日救世軍公報によれば

補臨時醜業婦救済所長　中校　山室機恵子

の記事がみえる。前年6月に結婚したばかりの山室軍平夫人は，この時既に臨月であったにもかかわらず，本願寺裏門（京橋区築地3丁目11番地）の民家を借受けて，山室夫妻はここに住むこととなり，夫人の教養と活動力が高く評価され，最初の婦人士官として，この大役が当てられたのである。

救世軍の廃娼運動については，既に沖野岩三郎による『娼妓解放哀話』（中央公論社・昭5年6月刊）があり，吉屋信子著『ときの声』（筑摩書房・昭40年7月）に詳しいが，西口克己著『廓（くるわ）』（三一書房・昭和31年11月）全3巻もまた参考となろう。特に小倉襄二著『社会保障と人権』（法文社・昭45年6月）は貴重な研究である。また伊藤秀吉著『日本廃娼運動史』（婦人矯風会廃娼運盟昭和6年刊）も見落してはならない。山室軍平自身の『公娼全廃論』（明治44年）・『公娼制度の批判』（昭和4年）・『不幸女の救護』（大正6年）をはじめ『芸者とは何ぞや』『飛田遊廓反対意見』『吉原の代表者と語る』『府民の

恥辱』など，いくつかの論説を読むことができる。[6] いずれ「救世軍と売春防止」については，別に稿を改めて書きたいと思っているので，ここでは触れない。

醜業婦救済所の山室機恵子の許には，次々と元娼妓・芸妓・酌婦とよばれた人々が来て，保護を求め，更生自立の新生活へ踏み出して行った。機恵子は彼女らに規則正しい生活訓練を第一とし，さらには多くの支援者を求め，月々の寄付を集めながら着物仕立・洗濯などの作業や座蒲団などの製作を教えた。創立満3年の報告によれば[7]

1.	婦人救済所に収容した者	87
	娼妓たりし者	53
	芸妓たりし者	7
	酌婦たりし者	11
	淫売婦たりし者	5
	その他	11
1.	親兄弟に渡しまたは就職させたもの	34
1.	結婚したもの	29
1.	不結果のもの	5
1.	不明のもの	9
1.	現在被保護の者の数	10

となっている。

〔註〕(1) 小野田鉄弥著，前掲書
(2) The Orders and Regulations for Soldiers.
(3) 山室軍平著『私の青年時代』前掲書
(4) 山室軍平著『救世軍略史』（救世軍出版及供給部・大正15年10月刊）
(5) 注4に同じ
(6) いずれも『山室軍平選集VI・社会事業及社会問題』に集録されている。
(7) 山室軍平著『山室機恵子』（山室軍平選集VIII・昭和28年6月）

5. 社会問題とキリスト教

明治30年代に入ってからの，わが国の経済界は非常な不景気となり，労働者の賃金値下げや，失業不安に襲われていた。この頃から『日本之下層社会』（横山源之助著・明治31年12月・教文館）のような社会問題・社会主義に関する著作や，社会問題

を研究する運動も活発化していった。

明治30年（1897）3月，片山潜がわが国最初のセッツルメント事業として「キングスレー館」を開設したとき，[1]「貧民研究会」を設立し，山室軍平も加っている。[2] また開館式1ヵ月後の4月3日に「社会問題研究会」の発会式があり，片山潜は「将来の労働問題」と題して演説している。この演説が労働組合期成会の結成となり，12月には機関誌『労働世界』が発刊され，片山は編集部長に推された。

キングスレー館の理事長植村正久の主宰する『福音新報』やグリーン博士(D. C. Green 1843～1913) の属する組合教会の機関誌『基督教世界』も，この頃は労働問題に深い関心を示している。明治31年秋『六合雑誌』を媒介として「社会主義研究会」が組織され，同33年1月には「社会主義協会」と改称して，安部磯雄が会長となり，事務所を片山潜の所へ移し，彼が幹事となった。

日本鉄道株式会社のストライキ（明治31年2月）は，その規模と統制ある運動で注目をひき，普通選挙期成同盟会（明治32年）の普選運動がおこなわれたが，これはあまり成果を収めることができなかった。しかし最大の衝撃を与えたものに足尾銅山鉱毒事件がある。古河市兵衛の経営がとり入れた新式採鉱で，鉱毒が渡良瀬川・利根川流域の農地を荒廃し，沿岸5万町歩・20万農民の生命・生活が危機に陥るいう公害事件である。明治34年12月，第16議会の開院式の日，田中正造（栃木県選出代議士）は，ついに天皇に直訴を企てるに至った。[3]

明治33年3月には労働運動・小作争議の弾圧を直接の目標とする「治安警察法」（法第36号），6月には「行政執行法」（法第84号）がそれぞれ公布されて，集会・示威運動は厳重な警察的取締によって，著しくその自由を奪われた。しかし明治34年（1901）4月3日『二六新報』（社長秋山定輔）の主催で，東京向島に第1回の労働者懇親会が開かれ，約5万人の参加者があった。これはまさにわが国最初のメーデーである。

ところが会が終ると，会場に入れなかった数万の群集がなだれ込んで，建物が破壊されるという大混乱が起った。これは『二六新報』が娼妓の自由廃業に力を入れていたので，吉原遊廓側がその復讐行為に出たのであった。この頃，わが国最初の婦人記者として，羽仁もと子が報知新聞社で活躍していた。

明治34年4月，日本橋区木石町の労働組合期成会事務所に片山潜・幸徳伝次郎・木下尚江・西山光次郎・河上清・安部磯雄の6人が集った。社会主義協会のメンバーである。彼らは，

> 如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは，実に20世紀におけるの大問題なりとす

の宣言をもって「社会民主党」の結成をはかり，結社届を出したが，即日禁止された。片山らは名称を「社会平民党」と改めることにしたが，これも直ちに禁止され，わが国最初の社会主義政党は，呱々の声をあげると同時に圧殺されてしまった。(4)

ここで注意すべきことは，創立者6名のうち，幸徳伝次郎を除いて，すべてキリスト教徒であったという点である。しかも彼らは救世軍の活動についても，深い理解をもってこれを支援した人々である。山室もまた救世軍は如何なる場合も，政治活動には関与してはならない戒めを守ってはいたが，個人的には交際もあり，また教えを受けることも少くはなかった。

安部磯雄は，明治20年4月，当時教会員400人を越える全国有数の岡山教会に，金森通倫（1859～1945）の後任牧師として赴任した。23才であった。また石井十次の岡山孤児院のため募金運動に協力し，

> 私は同志社以来一方には基督教によりて精神的希望を充たし，一方には慈善事業によりて物質的救済を行はねばならぬといふことを考へて居た。石井の孤児院が創立された時には私自らも目的の一部が達せられたかの如くに感じた。勿論私は教会の方が本職であり，孤児院は石井が専心一意経営に当つて居たのであるから，何も私が直接助力する必要はなかつた。然し慈善事業は私の最も重要なる目的であり，且つ趣味であつたから，機会さへあれば，これを援助したのである。後年米国に留学した時にも私はニューヨーク市に於ける多くの慈善事業を視察したのである。私をして遂に社会主義者たらしめるに至つたのも，畢意するに最初慈善事業に対して深き興味を有して居たからだ。(5)

と書いている。このように彼をして社会主義者としたのは，慈善事業であ

ったが，慈善事業を実践した石井十次は，決して社会主義者にはならなかった。

> 石井の思想を見ると神と人，霊と肉という対立があり，社会と個人という対立はなかったが，安部のように精神の世界と物質の世界を分けて，それぞれの論理をみとめるという考え方は石井にはない。これが安部をして石井から袂を分たしめた。(6)

という見方をするものもある。

〔註〕 (1) 吉田久一「社会事業と労働運動の分岐・片山潜の場合」（社会事業研究所編『社会福祉研究第6集』・昭和29年7月）
(2) 明治31年（1898）4月，本郷真治郎・片淵啄・松原岩五郎・布川静淵・松村介石・高野房太郎・安達憲忠・片山潜・山室軍平らがメンバーである。
(3) 雨宮義人著『田中正造の人と生涯』（茗渓堂・昭和29年11月刊）
(4) 赤松克麿著『日本社会運動史』（岩波書店・昭和27年1月刊）
(5) 安部磯雄自叙伝『社会主義者となるまで』（明善社・昭和22年11月刊）
(6) 柴田善守著『石井十次の生涯と思想』（春秋社・昭和39年4月刊）

6. 慈善事業と社会事業

安部磯雄は「社会主義研究会」の発足にあたっては会長におされ，また社会純潔化運動に情熱を傾け，機関誌『廓清』に健筆をふるい「鳥の啼かない日はあっても，安部の廃娼について叫ばない日はない」と言われたほどである。大正15年（1926）社会民衆党結成，委員長となった（書記長片山哲）。彼は大正・昭和期に一貫して，社会民主主義の立場を守り通したのである。(1)

安部はまた，明治34年4月『社会問題解釈法』（東京専門学校出版部・菊判・450頁）を出している。これは社会福祉を研究するものにとって，重要な書物である。後藤新平が社会事業官僚として，始祖的位置にあるということについては先に述べたが，のちに内務大臣として，最初に社会事業の行政課たる「救護課」を設置した（大正6年 1917）ことにも関連する。後藤の後継者としては，防貧政策を力説した窪田静太郎が『貧民救済制度意見』（明治32年刊）を書いているが，専門的慈善事業家としては留岡幸助（1864～1934）をあげるべきであろう。

留岡は明治27年（1894），監獄学研究のため渡米，帰国すると直ちに『慈

善問題』（明治29年・春陽社）を出版し，明治32年（1899）には，東京府北豊島郡巣鴨村に，わが国最初の感化教育「家庭学校」を創設した。翌33年には，窪田静太郎・小河滋次郎らと「貧民研究会」を組織している。

・この『慈善問題』では，

> 吾人は慈善問題を滞りなく解釈せんと欲せば宗教より出づる熱愛，学術の与ふる光明なかるべからず，この両者を融化調和したるものは即ち吾人の所謂学術的慈善事業是なり（下略）

と述べており，『感化事業の発達』（明治30年刊）とともに，彼の代表的著述として，今も社会事業の古典といわれている。安部の『社会問題解釈法』はその5年後であるが，

> 社会問題の研究は如何に多岐に亘るにもせよ，詮じ来れば如何にして貧民を救ひ，貧富の懸隔を減し，更に貧困てふ争を根本的に社会より除去すべきかに在り。（中略）問題其れ自身は極めて簡単なるものと云ふべし。唯其解釈法に至りては頗る複雑にして困難なるが故に，社会問題の研究てふ事は問題の研究にあらずして解釈法の研究なる事を知らざるべからず。

として，貧困救助策には，慈善事業・教育事業・自助的事業・国家的事業・根本的改革の5種に区別し，

> 余は慈善的事業を Charity Work の意に解して之を博愛事業 Philanthropic Works と区別せり。博愛事業は社会の不善を改新し，貧者無学者を扶助する処の事業，（中略）慈善事業とは物質的扶助を貧困者に与ふる事にして即ち衣食住或は金銭等を以て有形的扶助を与ふる事なり。慈善事業を以て純粋に個人的事業と見做し，これを国家事業と区別する。

として，5種の救済策の長短について論じているが，特に救世軍について項を設け，

余は救世軍を以て慈善事業中の最も弊害少なきものの一ならんと信ず。彼等の金言は「人は額に汗せざれば食すること能はず」てふことなるが故に，彼等は自ら助くるものを助くると雖も，手足を働かすことを肯ぜざるものに対しては一銭の助をも与へざるなり。（中略）吾人は更に救世軍の成功したりし原因として一事を述ぶべし。慈善事業に於ける成功の秘訣は何物を与ふるよりも先ず心を与ふるに在り。（後略）

と述べている。安部は明治27年（1894）7月，初めてロンドンの地を踏み，セッツルメント事業は勿論のこと，「救世軍の事業に対しても出来るだけ視察を怠らなかった」（『社会主義者となるまで』）のであった。おそらく，この種の学術書のなかで，救世軍の活動が，これほど取りあげられたのは，本書が初めてではなかろうか。

しかし，ここで特に注目したいことは，安部磯雄は本著で，慈善事業・博愛事業の語を用いており，大正10年（1921）の，同じく安部の著書『社会問題概論』（早稲田大学出版部刊・大正10年3月）においても，救済事業の語を用いている。

また，留岡幸助が，明治42年（1909）10月の開教50年記念講演で，従来の慈善事業を一歩前進する思想として「積極的慈善事業」といっているのに対して，山室軍平が士官に就任以来，編集の事実上の責任者となっている機関誌『ときのこゑ』の娼妓自由廃業特集「婦人特別号」（明治33年8月1日）には，

救世軍社会事業部及び本営
出獄人救済所（神田三崎町3丁目1番地）
水夫館（横浜山下町123番地）
救世軍日本々営（東京芝ロ2丁目3番地）

とあり，特に日本司令官大佐 ブラードの「我醜業婦 救済所と 出獄人救済所」の論説のなかには

（上略）出獄人救済所は法律を犯して懲役人となり，躰面を失ひ，友人を失ひ，職業を失ふて居る人々を引取り，之を其以前に恢復する場所である。醜業婦救済所は，苦しい勤に身も心も疲れ果て，然りとて借銭の

高は益々加はり，何時自由が得られると云ふ見込みがなくて，世にも憫(あは)れなる毎日を送つて居る婦人達を救ふ為に設けたる所であります。（中略）救世軍社会事業の目的は現在，困窮・悪行・犯罪の餌食となり，又は餌食とならんとする者の身の有様を改善し，現世(このよ)及び来世(のちのよ)の救を得せしむるにあり。（中略）社会事業は唯霊魂の上の救を宣伝へる丈(だけ)でなく，亦其肉体(からだ)の上にも然るべき救済を施す必要のある人々の為に営む者で，併し乍ら其大目的に於ては固より，神様と基督とを余所にし様筈がないのみならず，此う云ふ入組んだる社会へ入れば入る程私し共は益々人間の力の限あることを知て，全能なる神様に依頼(よりたの)むわけであり升(ます)。（下略）

と述べている。

わが国で「社会事業」という言葉が一般化したのは，(2) 大正3年（1914）第1回仏教徒社会事業大会が「社会事業」の名称を公式に用いた最初といわれ，大正4年基督教協同社会事業大会を催し，全国救済事業大会が，大正9年（1920）第5回大会から社会事業大会に改められていることを考えると，救世軍はそれよりも10数年先んじていたことになる。これはおそらく，編集責任者としての山室軍平の飜訳命名したものと思われる。そこには今までの，わが国にはみられなかった斬新な事業として，従来の概念を越えようとする自負があったのであろう。

また明治34年（1901）2月に，『救世軍戦争記』（46判百頁 定価十銭）が出ている。これはのちに，毎年出すようになった年度報告書の先鞭をなすものであるが，その第4章は「社会事業」について述べている。わが国において従来慈善事業のなかでしか考えられていなかった事柄を，時代の問題としてとりあげ，社会性をもって考えようとするところに，社会事業という用語が生れたのであろう。救世軍の社会事業を改めて見直す必要があるとする理由もまたここにある。

明治35年末には，「救世軍愛隣隊」なる，いわゆる友愛訪問（friendly visiting）運動が実施され，同36年正月には「印半纏会(しるしばんてん)」なる労働者運動が起り，山室軍平が，第1回の渡英から帰えって来たとき，（明治37年11月）戦勝の日露戦争の最中であったが，出征軍人遺家族，軍人ホームをはじめ「東北凶作地子女救護運動」「労働紹介所」「女中寄宿舎」，宿所提供施設として

の「箱船屋」「労働寄宿所」さらに「禁酒一膳飯屋」などを，次々と実施していずれも相当の実績をあげ，また満州大連に「婦人ホーム」を開設（明治39年）するに至った。

これらの活動については，更に稿を改めて書きたい。

〔註〕(1) 高野善一編『日本社会主義の父安部磯雄』（同刊行会・昭和45年5月刊）
(2) 三吉明著『改訂社会事業講義』（敬文堂・昭和36年刊）

結

日本歴史学会の依嘱によって，『山室軍平』（人物叢書・吉川弘文館）に着手したのは，昭和42年末のことであった。43年秋には畏友山室周平氏の御教示を得，救世軍本営で山室民子大佐補に会い，翌夏の休暇を利用して，宮崎県茶臼原を訪ねた。引き続いて岡山県下の石井十次ならびに山室軍平ゆかりの地に，1人でも多くの人々を求めて資料を蒐め，『日本歴史』(1969年7月号)に，「山室軍平と社会事業」を書いた。秋には京都の同志社大学図書館の，記念文庫を見ることができた。

昭和45年の春には，山室武甫氏を初め渡善子（婦人之友社編集局長）・賀川豊彦夫人・頼川救世軍大佐など，貴重な対談の機会が与えられ，甲府市に山田基男氏（山梨英和学院長）を訪ね，資料を拝借，また原町市金森淳氏から金森通倫自著『回顧録』を送ってもらうなど，思いがけない収獲もあって，ほぼその目的を達した。

このような苦労の故もあって，さて執筆にかかると，またたくまに所定の枚数を越えてしまって，捨てるに捨てられないという苦境にあるという為体である。いわばこれらの資料のうち，特に社会事業に関しては，その大部分が山室軍平自身既に大小いくつかの機関に発表しているものであるとはいえ，わが国の社会事業史の流れのなかにこれをみるとき，ともすれば見落されているいくつかの事実を，新らたに正しく位置づけてみることが大切ではないかと思い知らされ，ここにその一部を整理してみたのである。

（46．1．28 記）

Research Methods in Social Welfare

Mantaro KIDO

Research in social welfare can be divided into two categories, those of problem finding and problem solving. In order to identify the problem the method of historical and comparative study may be adopted. This enables one to recognize the difference of viewpoints in social welfare, because social welfare is a result of social policy. Then we have to determine our own standpoint by critical investigation. If the standpoint is decided, by reviewing the present situation of social welfare, the problem will be solved and then we can study the method which is necessary to solve the problem. The method we can enumerate are historical critique, conditional genesis, executive organization and social valuation. Therefore, the research of social welfare must establish an interdisciplinary research system that synthesizes the necessary sciences in order to obtain a practical science that owes the solution of actual problems to the project method.

"Gumpei Yamamuro; Of the Salvation Army's Social Work in Japan"

Akira MIYOSHI

It is no exaggeration to say that social work in modern Japan was mostly launched by the Salvation Army of Japan. This is a research paper on the Army's social work mainly led by Gumpei Yamamuro, the first officer of Japan's Salvation Army.

Casework and Counselling — On Unification and Characteristics of Casework and Counselling —

Yoshihiro OHTA

Casework and counselling have developed as different professions with a good deal of similarities, but recently H. H. Aptekar's suggestion of a single unified profession has given rise to much confusion. Unification tends to exclude casework on account of its undeveloped condition. Unification, however, has been discussed only on the side of casework without enough understanding and cooperation of counselling or psychotherapy.